「国際浅草学プロジェクト発足にあたって」

ミュンヘン大学アジア学科教授
エーヴェリン・シュルツ

ミュンヘン大学の日本センターで、近代並びに現代日本の文学と文化という専攻分野を担当しています。文学といいますと、それは純文学の小説だけではなく、より広い意味での文学研究であると言えます。私は、その中で随筆や詩文から推理小説まで、幅広く文学作品を扱っています。主な研究テーマの１つは、日本の近代のあり方と思想的背景と、それに絡む近代文学の形成過程であります。こういう文学を研究するために永井荷風の作品をいろんな形で研究の対象にしました。

私が特に興味を持ったのは、永井荷風ばかりではなく、夏目漱石や森鴎外などの明治時代の代表的な知識人が、明治政府の近代化の政策をどういうふうに評価していたのかという問題でした。つまり、こうした批評が、あるいは批判が文学作品を通じてどういうふうに表現されているのかという問題です。

こうした研究の１つの結果は、近代日本における都市空間、特に東京空間のあり方と変遷ぶりが文学作品の中でとっても重要な、見落としてはいけない役割を果たしているということでした。こうした歴史と文学との分野をさらに詳しく研究するために、私は都市と文学を中心テーマにしました。私が特に関心があるのは江戸末期から明治初期、そしてその後、現在まで急速に近代化ないしグローバル化する東京、その中で近代日本の国家形成における東京の首都性がどういうふうに論じられているのかというテーマにも、とても興味があります。

皆様もよくご存じと思いますが、東京の文化、地理と歴史などを論じる書物は数えられないほど出版されています。その中ではルポ、小説、随筆、事典と地誌の記録、名所案内などがあります。

私はちょうど午後、こちら来る前にちょっと神保町の三省堂に寄ったのですが、東京について「江戸東京紀行」というシリーズで去年からたくさんの本が出版されていのを見ました。浅草についての具体的な記述もいろいろあり購入しました。

ところで、文学評論では都市形成のパラダイムとされるテキストは、ほとんどの場合いわゆる近代文学として観念化された作品です。明治時代に関して言えば森鴎外の『舞姫』、または漱石の『三四郎』、20 年代のモダニズムでは川端康成の『浅草紅団』などの作品です。文学者たちは、その作品の舞台を東京にとりながら、実際には作品中に東京そのものの具体的な姿を余り描いていません。ですから、東京に住む人々にとっての東京の歴史や空間のとらえ方を理解するために小説以外のテキスト、例えば名所案内書や地誌、あるいは東京の事典などを研究の対象にしました。最近の私の関心は、現在の都市再生論における日本の都市に残された古い日本の伝統的な町並み、いわゆる路地の再発見と風景との関係に向けられています。路地は昔から庶民的であり、日常生活の都市空間でありました。昔の

浅草にもたくさんの路地があったと思いますが、しかし、路地は、明治時代の市区改制政策を出発点にして、非文明的で、または不衛生的であるとされて、近代都市計画の枠組み以外の空間として位置づけられるようになりました。

20 世紀に入り、都市開発と工業化によって路地がだんだん取り払われて、最新の近代的な住宅とか、ビルとか、大通りに変化することになったのであります。ただ、東京の中では浅草はまだ路地が割と多い地域であると思います。現代の路地論とは、都市、まちづくり、市街地の歴史、風俗とアメニティ再生などの枠組みの中でとらえられています。そうした路地論は、結局、明治時代から現在まで近代日本の都市論に対する反論の１つとして、近代日本の都市開発と形成の問題と関連していると言えます。最近は文学研究と文化研究の立場から、そういった路地論の系譜と、現在の都市論における役割を明確にしてみたいと思っております。そのために東京の路地を案内する散歩文学を研究の対象にして分析しています。そのために、先ほど三省堂でいろいろなものを買っておきました。

こうした研究を背景にして、このたび「国際浅草学プロジェクト」にご招待いただけたことは大変うれしく思っております。皆様は私よりも詳しくご存じだと思いますが、浅草とは東京の中でとても特有な地域であります。例えば私の知っている限りでは、浅草の歴史は東京の中で一番古く、７世紀の前半までに遡るようです。そのときから浅草には数多くの庶民が観音様の参拝に訪れて、浅草はだんだん大きな町へと変わっていき、現在に至るまで庶民の文化の発信地として評価されています。浅草は歴史的にも、宗教的にも、文化的に中枢的な都市空間であります。浅草では都市空間のさまざまな機能が同時に絡み合っています。

私の専門分野でも浅草はとても重要な、特別な地域です。例えば江戸と東京の観光案内書をはじめ、近代と現代文学作品まで、井戸田先生が先ほどおっしゃったんですけど、川端康成とか谷崎潤一郎、永井荷風もそうですが、浅草は欠かすことのできない存在です。さらに日本の近代都市の発展を理解するために、特に 19 世紀の初めごろからの大衆文化の発展を研究するためには、浅草オペラや映画館など、数多くの大衆文化の施設ができたことからもわかるように、浅草は最も代表的な研究対象だと思います。

私には浅草についてもう１つ大きな研究テーマがあります。浅草は東京の伝統文化を有する観光地になっている一方で、そこに実際に住んでいる人々はどういうふうな生活様式のなかで時を過ごしているのでしょうか。または、都市再生のいろいろな政策と路地の再発見・路地の風景は、どういうふうな形をとって絡み合うのでしょうか。このような課題にとても興味があります。

また、これから浅草の市民の方と交流ができることを、とても楽しみにしております。このような意味で、このたび「国際浅草学プロジェクト」の研究員の１人として、浅草の歴史性と文化的な多様性、さらに今後の浅草の未来を国際的な、または地域との共同研究の形で研究できることを大変光栄に存じております。そして心から楽しみにしております。